

社会科学文献の翻訳ガイドライン

This book has been published with the generous support of the Ford Foundation. Special thanks are due to Galina Rakhmanova.

Copyright ©2006 by American Council of Learned Societies, New York. The ACLS grants use of this title free of charge for all non-profit, educational purposes. Proper citation is required; ACLS requests that citations include: "SSTP *Guidelines* is available in multiple languages at www.acls.org/sstp.htm." For all other uses, contact permissions@acsls.org.

ISBN: 978-0-9788780-5-4

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

社会科学文献の翻訳ガイドライン

(翻訳 上田明子)

PRINCIPAL INVESTIGATORS

Michael Henry Heim & Andrzej W. Tymowski



AMERICAN COUNCIL OF LEARNED SOCIETIES

社会科学文献の翻訳ガイドライン

(翻訳 上田明子)

目標

以下のガイドラインは、社会科学翻訳プロジェクト (the Social Science Project) により開発された。プロジェクトはアメリカ学術会議 (the American Council of Learned Societies) の後援を受け、フォード財団 (the Ford Foundation) の財政援助を得た企画である。(社会科学翻訳プロジェクトの参加者リストは、付録Aを参照されたい)。ガイドラインは、社会科学の分野において、言語の境界を越えたコミュニケーションの促進を意図して作成されたものである。

翻訳は複雑、かつ知的能力の活用を最大限に必要とする過程であり、翻訳を依頼、また編集するすべての人は、この過程に精通する必要がある。「翻訳の中に失われて」というキャッチ・フレーズは翻訳過程の落とし穴、困難点、潜在的な不完全さを強調するが、翻訳を通して十分なコミュニケーションが可能であることを、最初から強調したい。加えて、翻訳は創造的な力である。すなわち、目標言語*に新しい語や、その語に伴う概念、慣行を紹介・導入する。(星印*を付した用語は語彙集、付録Bに定義がある。)

当ガイドラインは、本来、社会科学と分類される学問分野(人類学、コミュニケーション学、文化学、経済学、ジェンダー学、地理学、国際関係学、法律学、政治学、心理学、公共衛生学、社会学、および関連分野)にかかわるテキストの翻訳を扱うが、政府・非政府機関、報道機関および他のメディアによって作成されるテキストにも応用できる。ガイドラインは、主として、上記分野におけるテキストの翻訳を依頼し、編集する人々(単純化のために、まとめてエディターとよぶ)のためであるが、同時に、テキストの翻訳者、および翻訳を使う人々の関心をひくものである。

ガイドラインの主たる目的は、エディターが現実的な期待をもって翻訳過程に臨み、その仕事に適切な翻訳者を選び、翻訳過程において、翻訳者との効果的な意志伝達をはかり、受け取った翻訳の評価ができるよう援助することにある。言葉を変えていえば、ガイドラインはエディターが翻訳を契約し、吟味する際に、情報に基づいた決定ができるよう援助することにある。

ガイドラインは、翻訳マニュアルとして意図されたものではないが、翻訳者の関心をひくものである。社会科学テキストの翻訳を、例えば、文学、自然科学テキストの翻訳と区別する特徴を必然的に扱うこととなり、その特徴を扱うにもっとも適したノウハウを提供するからである。また、過程で浮上する可能性のある技術的問題（引用法、字訳化（他言語の文字で表記すること）、専門用語など）を提供する。

最後に、ガイドラインは翻訳の読者の役にたつ。翻訳の作成とはどういうことか、読者は翻訳に何を期待できるかを明確にすることにより、ガイドラインは、読者がより鋭敏な感覚と理解をもって翻訳を読むことを可能にする。

ガイドラインはどのようにして作られたか

このプロジェクトの参加者は、社会科学テキスト翻訳を専門とする翻訳者、多数の学問領域を代表する大学の社会科学者、一団のエディターとジャーナリストである。翻訳者たちは、参加者全員に、プロジェクト対象の4言語—中国語、英語、フランス語、ロシア語—の8範疇にわたる翻訳を用意した。8範疇は、社会言語学翻訳者が遭遇すると予想されるジャンルとスタイルを包含するよう意図された。すなわち、学問的研究（理論的テキスト、技術的テキスト、高度に専門用語の入ったテキスト）、学識のある読者向けに書かれたまじめなジャーナリズム、政府発行物、非政府組織（NGO）発行物、 маниフェスト、社説、投書、世論調査・研究調査である。翻訳者たちは、翻訳を準備する過程で発生した問題、その解決のために考え出した方策の記録をとった。参加者たちはプロジェクトの過程で3回集まった。第1回は、翻訳するテキストを選ぶため、第2回は、翻訳を検討するため、第3回はガイドラインを作成するためである。第1回の会議—2004年7月、モスクワ—の期間中に、参加者たちは、人文科学、社会科学の分野において、約300の研究のシリーズをロシア語に翻訳したチームのメンバーに会った（付録C参照）。第2回の会議—同年10月、ニューヨーク—の期間中に、プロジェクトの参加者は、社会科学テキストのエディターと編集者のための公開討論会を主催した。第3回の会議—2005年3月、モンテレー（カリフォル

ニア）—の期間中に、モンテレー国際研究所の翻訳・通訳大学院（the Graduate School of Translation and Interpretation at the Monterey Institute of International Studies）のメンバーと円卓会議を開いた。こうして作成されたテキストは、この分野の外部の読者グループにコメントを求めて送られた。ここに提示するガイドラインは、こうした長いプロセスの結果である。しかし、この過程が完結したと考える必要はない。参加者たちは、コメントと示唆を歓迎する。次の二人の主任研究者に連絡をしていただきたい。Michael Henry Heim (heim@humnet.ucla.edu), Andrzej W. Tymowski (atymowski@acls.org).

ガイドラインがなぜ必要か

社会科学文献のよりよい翻訳の必要性は明白である。シモン・ド・ボーヴォアール（Simone de Beauvoir）の影響力多大な著書『第2の性』（*Le Deuxieme Sexe, The Second Sex*）はフェミニストの基本テキストであるが、原著をひどくゆがめている（ニューヨーク・タイムズ・ブック・レビュー、サラ・グレーザ「翻訳で失われて」2004年8月22日号、13ページ参照。（Sara Glazer, “Lost in Translation,” *New York Times Book Review*, 22 August 2004, 13）。その翻訳者は、どちらかという基準もなしに選ばれたのだが、しばしば初歩的な間違いをしている。たとえば、その翻訳では、子供のデイケア・センターがない「ために」、女性は身動きができないという箇所を、「にもかかわらず」としている。もっと重要なのは、彼はボーヴォアールの出発点となった実存主義哲学のもっとも初歩的な知識を欠いているので、*pour-soi*（向自在性、対自 *being-for-itself*）を、女性の「本当の姿」あるいは「女性の本質」と訳し、*subjective* という語を、実存哲学の「選択の自由を行使する」ではなく、口語で使う「個人的な」という意味で使っている。その結果、ド・ボーヴォアールの何世代もの英文読者は、誤った証拠に基づいて、彼女の立場についての見解を持ってきた。その翻訳は1953年に出版され、今もなお、英語で得られる唯一のものである。

社会科学文献の翻訳がもっと多量に必要であることはまさに明白である。時宜にかなっていてもいる。20世紀末に起こった重大な政権交代とともに、元の社会

主義ブロックの国々は、西欧の社会科学の古典を大量に翻訳する必要性を感じた。しかし、世界の他の部分もこれまで怠慢であった。中国における最近の発展についての論文集を見ると、西欧側が中国の研究者の著作を通して、中国の社会について学ばなくてはならないことがはっきりと証明される。下記のかなり長い文を引用する—必要な変更を加えれば、同じ論点が世界共同体の全体に適用できようから。

1世紀以上前から、中国の知識階層は中国において、欧米思想と文学の翻訳・紹介に携わってきた。戦争、内戦、その他の多くの騒動を含む政治的展開が、この学問的な仕事の長い流れを中断させたが、止めることはなかった。今日、中国の読者たちは、自分の母語で欧米の文学、哲学、政治・経済思想、そして世界の古典的テキスト、現代のアイデアに至る広範囲の文献に接することができる。しかし、この文化接触は、一方通行になっている。欧米における中国思想と文化の翻訳には、伝統的中国文化の深さと広がりも、世界の現代史における中国の重要性も、比較できるほどに、反映されていない。古典文学の詩と小説には、熱心で、すぐれた翻訳者があった。しかし、歴史や哲学はそうには扱われていない。... もっとも明らかな例を挙げると、中国の自由主義初期の中心人物である胡適 (Hu Shi) の主業績は英訳されていない。一方、魯迅 (Lu Xun) のエッセー—すくなくとも、彼の小説と同程度に影響力があるのだが—、あるいは、陳寅恪*(Chen Yinke) の歴史研究も同様である。... 1980年代から、中国の文学作品は他の言語に翻訳する価値があると、時宜をえた総合的な形で国際的に認められてきている一方、現代の知的討論には、これはまだあてはまらない。ニーズメディアの乏しい、継続性のない報道でのみ情報を得ることができるにとどまる。(Chaohua Wang, ed. *One China, Many Paths*, Verso: London/New York, 2003 [9-10]王超貨*) (*の記号は、現代中国では、簡略字が用いられていることを示す。)

翻訳の財源

翻訳の少なさの理由としてよく挙げられるのは、一般に、経費である。社会科学では、当該文献のすべてではないとしても、そのほとんどは、報酬を期待して書いたものではないので、経費の要素は、特に顕著である。原稿を無料で受け取れることを常としているエディターは、彼らの減少していく資金のいくらかでも、翻訳のために提供することを嫌う。特に、社会科学のテキストが利益を生むことはめったにないから。このディレンマからの一つの脱出法は、仕事の費用をまかなう助成金に応募することである。多くの政府の文化・情報機関が彼らの国語からの翻訳の費用を引き受けている。エディターの国の大使館文化担当官から関係するプログラムの情報を受けられるであろう。また、エディターは、考慮しているテキストの主題を専門とする研究機関に接触することを考えてもよからう。

翻訳者とは？

基本的でありながら、しばしば見逃される指針は、翻訳者は、自分の母語*、ないし支配的言語*への翻訳をするということである。翻訳者は、その言語で、もっとも正確に、効果的に表現できる。翻訳する言語に精通していなくてはならないのは当然だが、両方向に翻訳できるほど、翻訳する言語を完全に習得している人はめったにいない。真の2言語使[併]用者*—2つの言語の中で、同じように教育を受けて育ち、同じように文化適応をしている話し手—は、この規則から除外が可能と考えられるが、真の2言語使用者は、ほとんどいないといっている。

つまり、いかに完全に2言語を習得していても、それだけで自動的に翻訳者とはなることはできない。2言語を知っていることはもちろん前提条件であるが、翻訳は技能であって、どの技能にも共通なように、訓練を必要とする。出来上がった翻訳の質は、翻訳者が受けた訓練により変わってくる。生来の才能と備わった適性が関係してくるのは事実だが、才能を育てるためであろうと、専門的な手順を教えるためであろうと、専門家による指導が重要である。

訓練は、伝統的に、翻訳・通訳を専門とする大学院級の機関で行われている。しかし、最近では、大学がこの分野で、コースを提供し、学位さえも与えている。両方の種類のプログラムの詳細は次を参照のこと：atanet.org/certification/eligibility_approved.php and www.lexicool.com/courses.asp.

典型的な修士 (MA) のカリキュラムには、翻訳の理論、翻訳の技術と手法、翻訳の道具とテクノロジー、専門職としての翻訳、などが含まれる。

高度に専門的な学術的テキストは、その分野の学歴を持つ研究者によって翻訳されるのがもっとも望ましいので (後続の「社会科学テキストの特殊性」、「終わるに当たって提案」参照)、研究者であり同時に翻訳者であることを目指す者にとって、翻訳で学位を得るのはその道ではない。しかし、大学の中で、翻訳の実際教育を受ける可能性は増しているから、自分の将来の研究に重要であると思われるテキストの翻訳をしたいと考えている社会学者は、あるプロジェクトに取り掛かる前に、翻訳のコースを探してみるべきである。

では、誰が翻訳者か。翻訳者とは、その母語*、あるいは支配的言語*が目標言語であり、起点言語に精通し、そして、翻訳の技術の専門職訓練を受けた人である。

翻訳者の選択

翻訳者を探しているとき、依頼者のエディターをいつも悩ます誤解は、2言語の知識のある人は誰でも翻訳者となることができ、起点言語を母語話者とする人は、起点言語のテキストをよりよく理解でき、したがってよりよい翻訳を作ることができるということである。これが本当でないことは、この時点までにはお分りであろう。2言語の知識があると、あるいは、自分の言語でない言語に翻訳できると公言する人のすべてが、満足のいくように翻訳できると期

待するのは、現実的でない。これまで見てきたように、理想的な翻訳者は、その母語、ないし支配的言語が目標言語であり、起点言語については、専門教育を受けた知識があり、翻訳の技術の訓練を受け、そして一特にテキストが学術的なものである場合には一関連分野の専門知識を持つ人である。そのような翻訳者を見つけることは、気が遠くなるほどの仕事である。¹

研究文献の場合には、エディターは同じ著者による文献の以前の翻訳作品を検討することから始める。その著者に、前に翻訳がない場合には、エディターは、同じ言語を扱い、同じかあるいは関連分野で、翻訳者たちがした作品を検討する。エディターは、また、著者が、関連のある分野の研究者たちの中で、母語あるは支配的言語が目標言語である人々を知っているか、また、その研究者たちが翻訳をしたことがあるか、あるいは翻訳をするにに興味をもっているかを確かめてことも役に立とう。

さほど研究的でない文献 (一般読者のための社会科学の話題についてのテキスト、政府、非政府団体により作成されたテキスト、など) の場合には、エディターは、しばしば分野別になっている公認翻訳者のリストを利用することができる。これは、いろいろな国の翻訳者協会から手にいれることができる。翻訳者協会のリストの最近版は次のウェブ・サイトを参照のこと。国際翻訳者協会 (Federation Internationale des Traducteurs/the International Federation of Translators: www.fit-ift.org/en/news-en.php)。そして、Members をクリックしなさい。

よさそうな候補者がどちらの方法でも見つからない場合には、依頼者であるエディターは、二人の翻訳者をチームとして使うことを考えてもよからう。起点言語を母語ないし支配言語とする話者と、目標言語を母語ないし支配言語とする話者のチームである。前者はおおよそその翻訳を提供し、後者は、あいまいな箇所については前者と相談しながら、満足

¹これらすべての要求事項を満たす翻訳者は即座に得ることは難しいので、研究者たちは、自分の母語でない言語に翻訳することを求められる人々に助力するために技術を開発している。(付録D、文献表の「訓練」の部分参照)

のできるテキストに改訂する。チームの両者が、その内容の分野を知っていることが、好ましい成果のまさに前提条件である。

いずれの場合にも、エディターは、翻訳者にサンプルの文書を翻訳することを求めることを考慮すべきである。サンプルは、2, 3ページで十分である。エディターは、2人か、それ以上の翻訳者にサンプルを求めて、比較することを考えてもよからう。そのようなサンプルのために支払うわずかな金額は、全翻訳が出来上がってきて、欠陥があったり、あるいは使えないものであっても、それにも関わらず支払わなければならないという不幸な可能性に比べれば、払う価値のある投資である。

エディターと翻訳者のコミュニケーション

社会科学は、公共の秩序と、したがって何百万の人々の生活に影響を及ぼす可能性を持っているので、翻訳者もエディターも、可能な限り、もっとも信頼のおける翻訳を作る義務がある。両者の実りある共同作業が非常に大切である。(エディター・翻訳者の共同作業のケーススタディーのいくつかの短い例については、付録E参照。) 編集の慣行、および編集過程につき込める財源については、多様なので、ここでは、理想的なシナリオを記述し、理想的な状態に達しない場合のための示唆とともに、修正法を示す。

翻訳の作業を始める前に、当然のことながら、依頼するエディターは、テキストの著作権を取得し、翻訳者と契約を結ばなくてはならない。契約と、それが扱う問題点、すなわち、支払いのレート、支払いの方法(翻訳者は英語の世界で基準の、翻訳されたテキストの1000語に対し、あるいは、1ページにつき、あるいは、1つのキー打ちにつき、などについて、ある金額を受け取ることになる)、著作権、2次的著作権、期日、といったことは、国ごとに、出版社ごとに、あるいは、プロジェクトごとにまで、かなり異なる。レートは、翻訳者の経験、起点テキストの性格(あるいは時

には、起点言語の性格)により影響を受ける。したがって、契約やレートについて、ここで提案することは避ける。翻訳の仕事に経験のないエディターは、その国の翻訳者協会(このリストのウェブサイトは、「翻訳者の選択」参照)で得られる契約のサンプルとレートの等級表を参考にするといい。

依頼するエディターは、起点言語の読みやすいコピーとともに、社内で定められた書式要綱を提供する必要がある。これにより、原稿編集係は、貴重な時間と労力を技術上の詳細に費やさず済ませることができる。もしも可能ならば、エディターと翻訳者は、翻訳前の段階で実際に会うか、あるいは、それが不可能な場合には、書面で重要な問題を話し合うといい。エディターは、翻訳者に、翻訳がどのような状況で公にされるか、対象とする読者はどういう人たちかについて、知らせるべきである。テキストがどう使われるかは、翻訳者がどのようにそれを扱うかに影響するからである。翻訳者の方では、編集者に、予想される問題点(難しい語の多用、はっきりしない専門用語、難解な構文*)について、注意を喚起し、その解決手段を提案すべきである。例えば、翻訳者はエディターに、2つの極一文字通りの直訳と自由訳一の間可能な領域を示し、エディターの希望として翻訳を領域のどこに置くかをたずねてもいい。(直訳に過ぎる訳と、よりいい訳の例については、付録F 参照。) 翻訳者は、前もってエディターに、翻訳は原文とかならずしも同じ長さにはならないことを警告すべきである。例えば、ロシア語への翻訳は、英語の原文より、かなり長くなる傾向があり、英語への翻訳はドイツ語の原文より短くなる傾向がある。

起点言語のテキストを十分に理解するだけの言語の知識、および/あるいはその分野に特有の知識をもったエディターはまれなので、翻訳を依頼するエディターは、その言語を自由に使い、その分野の知識のあるフリーランスの編集者を、元のテキストと翻訳を比較するために雇うことも考えられよう。し

かし、起点言語に通じてないエディターでも、細心の注意を払って読めば、問題の箇所（非論理的な箇所、不統一な箇所、専門用語の難点、など）を発見することはできる。したがって、とくに作業の過程でサンプルを求めなかった場合には、仕事の進行にあわせて、1～2章をよく検討する必要がある。

エディターは、原稿の編集と整理の過程でなされたすべての修正を翻訳者に示すべきである。修正は両者間の意見の交換の結果とするのがもっとも望ましい。そのプロセスと、翻訳の全事業は手に余るもののように思われるかもしれないが、エディターは、テキストが翻訳でいったん現れれば、自立したテキストとして、それ自体が権威のある存在となることを念頭に置かなくてはならない。

著者と翻訳者のコミュニケーション

翻訳の過程で、著者が現存している場合、相談すべき程度は、著者の人柄、スケジュール、言語の知識および/または能力などを含む数々の要素にかかっている。翻訳者は、著者の代理として行動するので、協力することは著者の利益となり、著者が関わることは、助けとなりうる。しかし、問題がないわけではない。（この件に関するプラスとマイナスの経験の例は、付録E参照）

社会科学テキストの特殊性

社会科学のテキストは、一方では自然科学のテキスト（化学、物理学、数学などのテキスト）、および技術的テキスト（使用説明書など）、他方では文学テキストとは異なる翻訳法を必要と認められるほど、特徴のあるものであろうか。そうであると我々は信じている。

自然科学のテキストと技術的テキストは、扱う主題の詳しい知識を翻訳者が必要とするという点では、社会科学テキストに似ている。しかし、自然科学は本来、物理的現象とその計測に関わるので、語彙の選択は、型にはまり、曖昧性はまれな傾向がある。自然科学のテキストは、したがって、機械翻訳の

候補となるであろう。社会科学テキストの下部分野のあるものは、自然科学の技術性に近く、一例えば、政府機関の発行する文書—その範囲では、機械翻訳に向いているであろう。（付録G参照）

自然科学における学説は、概して、高い一般性を持ち、時には、普遍性に近くなる。社会科学の学説は、一般性を望むとしても、ある政治的、社会的、文化的事情にしばしば妨げられる。多数の状況において一般的な関係であっても、すべての状況で通用するとは限らない。例えば、1950年代、1960年代の中国では、個人財産のレベルと公共衛生のレベルという一般的には明らかな相関関係は見出されなかった。すなわち、中国の公共衛生は、その収入レベルの他の国に勝っていた。さほど明瞭ではなく、かつ重要なことは、学説の術語が、ある社会の経験的現実を効果的に写しださないことである。これは経験的現実を理論的言語で表すには、解釈が必然的に伴うという理由による。もう一つ、中国語の例を挙げれば、地域の風習を表すために翻訳に使われる「custom（習慣）」という語からは、欧州の「慣習法（customary law）」へとは導けないが、中国の「習慣」、すなわち、地方の基準や協定は、法律の地位に近い地位を持っているように見える。ある環境で発達した社会科学の術語を新しい背景に適用すると、その概念の範囲がそれぞれの状況で相違するので、誤解を生む翻訳となることがある。

文学テキストはスタイルの特性と表現の様式の上に繁栄する。社会科学のテキストが、その意味を伝え、影響を及ぼすためには、原則として、表現法には依存しない。ただし、著しい例外は存在する。スタイルを誇る社会学者もいる。まさに、ある社会科学のテキスト—例えば、歴史物語—は、文学に近い。しかし、一般的には、文学はニュアンスを、社会科学は明瞭さを重要視する。文学においては、アイデアと事実は、テキストにより、その中で創造される。社会科学では、テキストの外から来る。両者とも、文化に特有であるが、社会科学は、文学テキストより、しばしばことさらそうであり、文化間の相互作用を想定および/あるいは描写する。

社会科学の論述は、特殊であり、ある特定の学者の団体、あるいは、政府機関、非政府機関のよう

な共通の目的を持つグループの中で共有（あるいは論議）される概念を通して伝達される。概念は、専門用語の形式をとる傾向があり、その結果、文化に特有のものとなる。その特殊性は、民族的、イデオロギー的特徴と同程度に、それが生まれた時代と繋がりを持つ。暗黙のうちに、歴史的想定を組み込んでいるかもしれない。これは、ある社会が当然と考えてとくに取り上げない概念かもしれない。そのような語の「辞書翻訳」そのままでは、意味の微妙な差異を伝えられず、読者を誤解に陥れるかもしれない。ロシア語のkompromisは、英語のcompromise（歩み寄り）にはない否定的な暗示的意味をほめかすことができる。一方、中国語のxuanchuan（宣伝*）は、英語のpropaganda（宣伝）と訳されるが、英語のpropagandaにある否定的な暗示的意味をもっていない。

結果として生ずる相互関連性は翻訳者がテキストの主題のみでなく、それを取り巻く、より広い意味の領域に通じていることを要求する。テキストが形成された学問的状況は翻訳過程における暗示的ながら、決定的要因なのである。したがって、社会科学の翻訳者は、扱う学問領域あるいは機構の「言語」（その職業語、既定の事実、歴史的背景）を、起点言語、目標言語の両方で、自然な言語として扱えるほど、詳しく知っている必要がある。（付録Hのイマニエル・ウォラースタイン（Immanuel Wallerstein）による明瞭かつ説得力のあるエッセイ「社会科学の概念：翻訳における問題点」[Concepts in the Social Science: Problems of Translation”参照）

自国語化* 対外国語的*

エディターと翻訳者は、あるテキストを翻訳するための基本的方略について、同意しなくてはならない。翻訳者は、原文を目標文化にどの程度まで、「順応」させるべきか。つまり、原文の研究手法、知識の範疇、分類法、その他を、目標文化の概念を表す語彙や構造を使って、受け入れられやすくする必要があるのか。翻訳者は、読者に対し、彼らが実際に、原文ではなく、ある文化からの翻訳を読んでいることを示すために、どの程度まで、滑らかな言葉遣いを犠牲にして、起点文化の概念を表す語彙や構造を保持すべきか。

この問題を提示するもう一つの方法は次のとおり。どの程度まで、社会科学の翻訳は、原典のレトリックの特徴やスタイルを再現するように努めるべきか。完全な答えはありえないが、この問題は、我々の仕事の核心であり、次の付随する質問に導く。すなわち、ある社会科学のテキストの意味は、どの程度まで、形式により伝えられるか。その形式が失われるなら、同時に内容について失われるものがあるのではないか。これは、ジャンルと著者によって変わる。ジャーナリズムや宣伝の衝撃力は、その表現法によるところが多い。しかし、また、やり方は違っても、ハイデッガー（Heidegger）や、レヴィ-シュトラウス（Levi-Strauss）についても同様である。しかし、一般的には、翻訳者は明瞭さと形式の特徴の中間点を選ぶことになるだろう。

アイデアが、形となり、言語により表現される様式は、文化ごとに異なる。デリダ（Derrida）は、関係する文化的・歴史的重荷を考えずに訳すことのできるものは数字だけだと断定する。翻訳者は、目標言語と文化の読者に疎外感を持たせず、起点言語と文化の特徴を伝える方法を創造しなくてはならない。翻訳者は、論議過程を盲目的に再現して、読んで欲しい読者に理解されないものにしてしまうというスキラ（Scylla）の危険な渦巻きを避けなければならないし、読者がよく知り、気分のいい過程に作り変えてしまうというカリブディス（Charybdis）の誘惑も避けなければならない。両極端の間のどこに身をおくべきかという質問に、決まった答えはない。それぞれのテキストは、独特である。これは翻訳者とエディターが議論する価値のある問題である。しかし、指針としては、翻訳者は、目標言語の文体の限界を、結果が目標言語で異様に聞こえる直前まで、できる限り広げて、起点言語*の特徴を反映させるべきである。もう一つの表現をとれば、翻訳は理解されなければならないが、あたかも目標言語の社会学者によって書かれたかのように読める必要はない。目標は、テキストを可能な限り、それ自身として、信頼できるものにするのである。

ある国の料理が、新しい文化に入るとき、そのもともとの味わいは保たなければならないし、同時に、新しい消費者の口に合わなければならない。この比喩の当を得た帰結が示すのは、受け入れる文化

が洗練されたものであればあるほど、その文化はもともとの料理を、可能な限り最も本物でピリッとした味の形のまま、よろこんで受け入れることである。

社会科学翻訳の落とし穴

テキストの訂正 翻訳者はある程度まで、テキストを明快にし、新たな読者に受け入れられるようにして、エディターの役割を果たすが、テキスト中の誤りに気づいても、訂正を試みてはならない。訂正したい場合には、原文との不一致点を脚注、ないし翻訳者序文で紹介することを勧める。その記述は可能な限り客観的とし、論争的な評ではなく、説明の形式をとるべきである。

翻訳者は、地名のつづり違いのような小さな間違いは、ことわることなく自由に訂正していい。

文体の特徴を失わせること ある言語の「特性」あるいは「真髄」は、その言語の書き手の書き方に影響を及ぼす。よく知られているように、例えば、英語の構文法*は、多くの言語に比べて、短い文をよしとする。したがって、英語に翻訳する翻訳者は例えば、複雑で非常に多くの可能性をもつフランス語テキストを短い明晰な文にしたいと思うかもしれない。しかし、英語の場合でさえ、簡潔さ自体に価値があるのではない。英語のスタイル・マニュアルは文の最適の長さを10語と規定し、20語を越える文を「複雑にすぎる」として禁止するが、英語は事実、ずっと長い文を許容する。構文法によく注意をはらうこと（同時に句読点を正確に使うこと）により、言語の特性を損なうことなく、より長い文を作ることが可能である。翻訳者は構文法も情報を伝えることを心に留めなくてはならない。その伝える情報は、例えば、専門用語のように明示的でないかもしれないが、構文法は、我々がその主張を知覚し、解明する方法にたしかに影響を及ぼす。一步進めて、翻訳に「外国語化」の雰囲気を入れることを許すことも勧められよう。ただし、目標言語の構造に違反しないという条件の下に。（自国語化 対 外国語化も参照）

議論の形式を変更すること 言語の特性がその言語を使う人々の書き方に影響を与えると同様に、文化の知的伝統は人々の思考法と議論の構築法に影響

を与える。起点言語（翻訳される言語）の概念と論法の特質が、目標言語の特質と大きく相違する場合には、翻訳者は起点言語の特質を保つように努めなければならないが、同時に、読者が著者はおかしいと疑念を抱く程度にまですることは避けなくてはならない。論法のレベルにおける相違の例（文体レベルでの複雑な文の問題と類似する）として、次の事項がある。1) 具体的事実から一般的法則への論法（帰納法）対 一般的法則から具体的事実への論法（演繹法）。2) 経験法（主として（経験主義の）感覚所与あるいは経験から認識へと導く）対 推論法（主として観察ではなく、熟考ないし論理的推論より認識へと導く）。（再び、自国語化 対 外国語化、参照）

そら似ことば 翻訳者は2つの言語において同じ形でありながら、それぞれで異なる意味となる語に注意する必要がある。英語 sympathetic（同情的）対 フランス語 sympathique（英語の likeable, nice 「好ましい、いい」にあたる）。英語 gift（贈り物）対 ドイツ語の Gift（毒物）。借用語*（翻訳借用語ともよばれる）の場合も多く、ロシア語 killer（「殺し屋」、「雇われた殺人者」の意味で使われる）、フランス語 pick-up（「レコード・プレーヤー」の意味で使われる）がある。

概念のそら似 関連するが、さらに油断のならない危険は専門用語*を意識的あるいは無意識的に偏って翻訳することである。特に、概念のそら似*である場合に注意を要する。グローバリゼーションは専門用語の意味上の一致を増しているかもしれないが、偽の概念同族語はまだ存在する。例えば、the stateを字句どおりに訳せば「国家」であるが、これは誤った認識を生む可能性がある。国家の西欧的概念—これは明示的あるいは潜在的にウェーバー（Weber）の定義によるが—と、非西欧の著者、あるいは西欧の社会科学を非西欧国の社会機構に当てはめることに批判的な西欧ベースの著者が経験する異なった歴史経験に基づいた国家の概念との違いから生ずるものである。このように「インターナショナル」と見える専門用語も誤解を生む可能性があるし、極端な場合には、ある文化の意味を他の文化に押し付ける試みとなりうる。「デモクラシー」という一見、自動的に同じ意味を伝えると見受け

られるような語も、補足説明が必要となるかもしれないし、それが著作、論文を通して、読者が概念を理解する見方に影響を与える場合には、翻訳者の解説で補足説明が必要となるであろう。

時とともに、概念のそら似も発達することがある。なぜなら、意味内容は変化するかもしれないが、形式一語そのもの—はそのままの形でとどまるからである。これは、以前の（あるいは以前とはいえない）共産主義国の現在の場合である。中国語の *nongmin* 農民は、「小農、小作農 *peasants*」と共産主義のテキストではふつう訳されていたが、新しい経済状況では、「農民」と訳してよいであろう。時に、問題はもっと複雑である。中国語の *fengjian* 封建は、中国語のテキストでは「封建制 *feudalism*」と訳されていたが、今日のテキストではどうであろうか。マルキストの含みをまだ保っているだろうか。ob'ektivno (客観的に *objectively*) を使う時、ロシア人の社会学者は、どのような時にマルキストの立場での意味で使い、どのような時に、そうではない中立的な意味で使うだろうか。このような場合に、翻訳者は自分の偏見から、定義ではなく、解説をしてしまう危険がある。

語の意味変化は、世界状況の大変動なしに起こることもある。ある影響力の強い学者が生み出すかもしれない。例えば、ヘーゲル (Hegel) は *Aufhebung* という語を *aufheben*— 一字句どおりには、*lift* (持ち上げる)、比喩的には *cancel* (取り消す)— という動詞から作り、特定の哲学的意味を担わせた。ヘーゲルによる意味を伝えるために、ある翻訳者は、*sublation* (止揚)、他の人は *supersession* (交代)、*overcoming* (克服) を用いたが、ドイツ語のままを使う人もいる。どの場合にも、このような語には、翻訳者が脚注を付ける必要、あるいは、もし多数あるならば、総合的な紹介が必要である。*Aufhebung* のような専門語は、その学問分野で、キーワードである可能性があるから、翻訳者は特に注意を払う必要がある。

語の多用社会科学のテキストは、ほとんどの言語で、語を多用する傾向がある。翻訳において、これに対処する方法は、文法関係を表す語句を省くことである。

- *in order to facilitate implementation* > *to facilitate implementation*

実行を促進する目的のために > 実行を促進するために

- *the reforms which have been recently introduced* > *the recently introduced reforms*

最近導入されてきた革新 > 最近導入の革新

テキストにとくに反復が多く、あるいは不明瞭な場合には、翻訳者は前もってエディターに問題を指摘し、翻訳に、その欠陥を反映させることをエディターが望むか、最小限にすることを望むかを尋ねることも考えられる。（「翻訳者とエディターのコミュニケーション」参照）

専門用語の統一欠如 一般的には、2回以上使われるキーワードは、それぞれ同じ語に翻訳されるべきである。しかし、翻訳者は、まず、実際に同じ意味かどうか確かめなくてはならない。同じ意味でない場合には、別の語を使ってよいが、この選択は意識的でなければならない。問題の語が専門用語である場合には、脚注をつけることが適当であろう。

時代に特有の言語 言語的、文化的時代錯誤を避けるために、翻訳者は、原典が書かれた時期と、翻訳をしている時期の思想的、制度的な相違を意識しなくてはならない。例えば、偏見・差別排除のための表現を、時代を遡って使うことは避けなければならない。

専門用語*の扱い

新しい概念を導入する社会学者は、通例、そのために特別に考案した語あるいは句を使って表現する。(ブルデュー (Bourdieu) の文化資本 *capital culturel*、ウェーバー (Weber) のプロテスタント倫理 *protestantische Ethic* は典型的な例である。) 広く受容された場合には、それらは専門用語となる。その概念とそれを伝える用語は、しばしば高度に限定された文化内で使用される。その特定性は、民族的要素であり、あるいは国民的要素であると同様に、作られた時代に依存していることもある。その上、概念のそら似*である可能性もある。すなわち、同一の伝統においてさえ、複数の著者が違った意味を伝えることもある。その変化しやすい性質は、大きな問題となる。

専門用語の普及は、社会科学論文の主たる特徴なので、翻訳者は、それらを翻訳するばかりでなく、その存在を読者に認識させなければならない。総括的な解決法がすべての例に適用できるのではないが、専門用語に対して、同義語を案出するために昔から尊重されている次の2つの方法がある。1) 用語そのものを、借入語*として受け入れること。すなわち、その形のまま借り入れることである。(例えば、ソ連の専門用語を英語の *politburo* (共産党) 政治局、ロシア語 *politbiuro* < *politicheskoe biuro*) とし、同様に、英語で *gulag* (ソ連の矯正労働者収容所管理本部を表すロシア語 *gulag* < *gosudarstvennoe upravlenie lagerei*) を使うこと) 2) 翻訳借入語*を使い、ロシア語 *politruk* に対し、英語 *political instructor* (政治教育指導者) とすること。どちらの方法も最初は馴染みのない語あるいは表現を作ることになる。前者は外国語であり、後者は目標言語を、起点言語の枠の中にはめ込むことになるからである。しかし、言語というものは、遠い昔から借入語や、翻訳借入語を受容し、同化してきた。英語は、ノルマン人により征服 (1066) の後、フランス語から入った莫大な数の借入語により豊かになり、今日に至るまで、外国語を吸収し続けている。翻訳借入語については、英語の *kill time* (時間をつぶす) は、フランス語 *tuer le temps* からの翻訳借入語と気づいている英語話者は、何人いるだろうか。

いずれにせよ、翻訳者は、自分で作った術語を導入する場合、あるいは、それまでに容認されている術語を、自分の選んだ術語に変更したい場合には、術語に脚注をつけることが必要であろう。目標言語の一言語中型辞典 (英語ならば、オックスフォード・コンサイス辞典 *The Concise Oxford Dictionary*、ウェブスター・カレッジ辞典 *Webster's College Dictionary*) に収録されているのであれば、その術語に脚注は必要ない。したがって、*politburo* や *gulag* に脚注は必要ないであろうが、*politruk* には注が必要で、次のようになろう。「*political instructor* を *politruk* の訳語として使用する。*politruk* は、*politicheskii rukovoditel'* (政治教育指導者) からの混成語 (2語の意味と形を合わせ作った語) である。これは正確には、ソ連軍の兵士にイデオロギー指導をする任務の党役員のことである。」フランス語 *grandes écoles* の脚注は次のようになろう。(この語は、翻訳では、*great schools* (大学校) とせずに、フランス語そのままを使う、つまり借入語として「翻訳」するであろう。*école* という単語は、あらゆる教育機関の名称にあらわれるからである。) 「*grandes écoles* とは、フランスにおける最高の高等教育機関で高等師範学校 (*École Normale Supérieure*)、理工科大学 (*École Polytechnique*)、海軍大学 (*École Navale*) などを含む。」脚注はなるべく少なく、要を得たものでなければならない。付加的な、あるいは説明的なコメントは、翻訳者の序に入れるべきものである。

脚注は、地口 (同音・類似の音をあてて別の意味とするしゃれ)、言葉遊び、格言、文学的、あるいは一般的な文化現象への言及などを指摘し、説明するために使うこともできる。しかし、起点言語の読者には明らかでありながら、目標言語の読者には分からないものの説明のみに限るべきである。その上、脚注だけが、用語の意味を明らかにする方法ではない。例えば、翻訳者は、説明として、目立たない語をさしはさむこともできる。フランス語からの翻訳の読者が、文脈から、*grandes écoles* は、フランスの高等教育機関であるが、必ずしも最高の地位にあるものではないと理解してしまうと考えるならば、目立たないように、*the prestigious grandes écoles* (名声の高い *grandes écoles*) と説明の1句を加えることもよかろう。

ときには、脚注が必要な場合にも、翻訳の後に起点言語の用語をカッコに入れて示すことで、煩雑さを緩和ないし回避できる。ロシア語のpolitrukに英語 political instructor を訳語として当てた例に返ってみよう。用語の周辺の文脈が、軍との関係が十分明らかにしているならば、翻訳者は、翻訳のあとに原語をカッコに入れて、教育指導者 (politruk) と示してすますこともできる。それによって、専門語という地位を示し、原語でこの用語を偶然、知っている読者に、その語の起源を示すことができる。しかし、そのような手段は、逃げ道になりかねないので、しばしば使うことは勧められない。翻訳者の能力に対する自信を傷つけるおそれもある。

翻訳者とエディターのための技術的問題

- ・ 句読点は、目標言語の慣例にしたがう。
- ・ 外国の地名は、目標言語の慣例にしたがう。ロシア語 Moskva > 英語 Moscow (モスクワ)。街路の名はもとの言語のまま、ただし、通り (street)、街 (avenue) などに当たる語で、特に目標言語の文化で知られていないものは翻訳される。フランス語 Rue de Rivoli > 英語 Rue de Rivoli (Rivoli Street ではなく)、スペイン語 Avenida de la Constitucion > 英語 Avenida de la Constitucion (Constitution Avenue でなく)、ロシア語 Nevskii prospekt > 英語 Nevsky Prospect (日本語ネフスキー・プロスペクト)。ただし、ロシア語 ultitsa Gor'kogo > 英語 Gorky Street (ゴーリキー通り)。
- ・ 新聞、雑誌の書名は、もとの言語のまま使う。Le Monde (ル・モンド)、The New York Times (ニューヨーク・タイムズ)、Renmin ribao (人民日報)、Pravda (プラウダ)。書物名と論文名も、元の言語のまま使い、翻訳

をカッコに入れて、後につける。これは、テキストの中も、脚注でも、同様である。大文字の使用は、目標言語の慣習に従う。Le Contrat social (The Social Contract), Literature i revoliutsiia (Literature and Revolution)。

- ・ 度量衡の単位は、メートル法に変換した数値を、後にかっこに入れて表示する。50マイル (80キロメートル)、100 mu 畝* (67ヘクタール)。金銭の単位はそのままとし、変換を示す必要はない。
- ・ 機関を表すには、通常、もとの言語の名前を使う。École Normale Supérieure (日本語の場合は、次項目「字訳」参照。エコール・ノルマル・シュペリール、高等師範学校の両方が使われる)、British Council (ブリティッシュ・カウンシル、英国文化振興会の両方が使われる)、the Duma (ドーマ、国家会議 (ロシア連邦議会下院))。例外は、決まった形がある場合 (White House > フランス語 Maison Blanche) で、翻訳してもいいが、はっきりさせるために、字句どおりの意味を必要とする最初の場合に限る方が望ましい。
- ・ 著者が外国語として使っている語は、一般的にそのまま使う (翻訳が必要と判断されれば、そのあとに翻訳を入れる)。その外国語が目標言語の語である場合 (例えば、著者が英語を外国語として使い、翻訳が英語である場合) には、翻訳者は、その語を斜体にするか、脚注をつけて、そのことを表すことがよかろう。注意: この規則は、目標言語ですでによく使われている借入語には適用しない。(例えば、フランス語、ロシア語、その他多くの言語で用いられている marketing (マーケティング) など)。

- 原文が目標言語とは異なる書記システムを使っている場合、語や表題は、字訳（他の書記システムの文字に書き直すこと）をしなくてはならない。標準的
字訳のシステムが存在する場合には、翻訳者はそれを使うべきである。中国語のピンイン・ローマ字法のような、いくつかのシステムは、事実上、すべての言語で使われているが、一方、言語に特有のものもある。米国議会図書館 (the Library of Congress) システム (Barry Randall, *ALA-LC Romanization Tables*. Washington: Library of Congress, 1997参照) は、英語への字訳の基準となりつつあるが、フランス語、ドイツ語、スペイン語などへの字訳には基準とはなっていない。字訳のシステムが言語に特有のものである場合、翻訳者は、起点言語のシステムを目標言語のシステムに転換しなくてはならない。(フランス語ではTchernobyl (チェルノブイリ) であるものが、英語の翻訳ではChernobylとなる。) 時に2つのシステムが共存すると、事態は複雑となる。一名前、場所名に主として使われる一般的なシステム(ゴークー Gorky という名前と地名の場合のように) 一と、語彙項目、書目、参考文献、引用などに使われる学術的なシステム (Gor'kii) が共存する場合である。使用すべき適当なシステムについて迷いのある場合には、翻訳者は、その地の翻訳者協会に問い合わせるべきである。
- 著者が目標言語で書かれた一節を引用している場合、翻訳者は著者の翻訳を再翻訳するのではなく、もとの言語のままを使うべきである。著者が出典を明らかにしていない場合、翻訳者は、関連するデータベースを用いて探すか、あるいは著者にたずねるべきである。

- 翻訳者のための主な参考図書は、起点言語と目標言語、それぞれの一言語の辞書である。二言語辞書は次の2つの場合に役に立つ。1) 翻訳者が起点言語において、ある語の意味は分かっているが、目標言語でそれにあたる語が直ぐに思い出せない場合。2) 語が植物名、動物名などであることが、一言語辞書で分かった場合—すなわち、そのままの形で目標言語でも使われている可能性が大きい場合。シソーラス(類義語・反語・関連語辞典)は、もっとも完全な二言語辞典よりも多くの同義語を提供する。

参考書目から必要な知識が得られない場合には、翻訳者は教育のある起点言語の母語話者一でできれば、テキストの分野に専門知識を持つ一人に頼るべきである。専門知識を持つ目標言語の母語話者も、貴重な役割を果たす。すなわち、翻訳を読むように依頼すれば、翻訳者とエディターに注目すべき事項を提供することができる。「翻訳者とエディターのコミュニケーション」と「評価」参照)

評価

エディターが起点言語を知っているかどうかにより、評価の過程は変わってくる。その言語を知っている人は、翻訳と原文の間を往復する代わりに、翻訳を独立したテキストとして読み、翻訳のある一節が、なにかひっかかる、おかしいと思われる時だけ、原文を参照すれば、作業は非常に能率よく進む。言語を知らない人には困難が伴う。出来上がった結果の質をどうやって判断できるだろうか。著者の類似したテキストの翻訳—特にいい評価を受けているもの—をあらかじめ読んで備えることはできる。新しい翻訳については、同様に独立したテキストとして、説得力のあるものかどうかを見きわめなくてはならない。注意して読めば、難点となりうるものを見出す見込みはある。しかし、原文に通じてないので、ある一節がおかしいと思われるときには、翻訳者と相談しなくてはならない。あるいは、両言語とテキストのトピックをよく知る外部の校閲者を雇うこともできる。

終わるに当たって提案

翻訳者は、生まれつきではなく、訓練を経て翻訳者となる。翻訳者は、関係する両言語の確かな知識を備えていなければならないのはもちろんだが、専門的訓練もまた欠かせない。必要な訓練の性質は考慮中のテキストの性質による。各種の翻訳は、各種の翻訳者を必要とする。社会科学の学術的テキストは、社会科学の研究者により扱われるのがもっともいい。その分野の知識が翻訳の成功には必須だからである。より一般的な読者を予想するテキストや、政府機関、NGOが発行するテキストは、その領域の訓練および/あるいは経験のある職業的翻訳者により翻訳されるのが望ましい。適当な翻訳者をしかるべく求めるよう、エディターに勧める。

一般読者を対象とするテキストに、適切な翻訳者を見出すのは比較的容易である。社会科学の分野で十分に専門的訓練を受けた/あるいは経験を持つ翻訳者は存在するし、翻訳者協会を通じて連絡をとることができる。(公認された協会のリストを求めるには、次の国際翻訳者連盟 (the International Translators Federation) のウェブサイトに行き、Membersをクリックすること：www.fit-ift.org/en/news-en.php)。当該国の協会におけるメンバーの大多数は、その国の言語の母語話者であり、その言語に翻訳するが、その言語から他の言語に翻訳することに適格な他の言語の母語話者もいる。したがって、どちらの方向にせよ、翻訳者を求めているエディターの最初の手がかりとなる。

学術的テキストの場合には、それほど満足すべき状況にはない。すくなくとも英語圏においては、ある言語からの翻訳ができるほど、その言語の能力が十分にある社会学者は少ない。翻訳技術の訓練を受けた者はさらにまれである。社会科学の分野は、翻

訳の過程と効果の持つ重要性を評価すべきである。学問的基準の厳格性を満たすためには、社会学者が同僚の社会学者の翻訳をすべきで、そのために、社会科学の学問分野として翻訳の適当な訓練がもっと広く提供されるようにする責任を負わなくてはならない。そして、社会科学界で翻訳はもっと高く評価されねばならない。

推奨項目の一つはすぐに実施できる。社会科学科のアドヴァイザーは、大学院生に、上級外国語コースと翻訳のワークショップに登録するよう勧めるべきである。学生を誘導するために、彼らの研究に直接関係のある学術的研究の翻訳をするよう、研究助手に採用して、資金を提供することができる。もう一つの推奨項目は、実施にもう少し時間を要する。分野が全体として、その学問分野の主たる論文・著作の翻訳を、テニユア・トラック（終身雇用につながる身分）の教員が提出した場合、それを完全な学術的な仕事として認める必要がある。例えば、フコー(Foucault)や、ハーバーマス(Habermas)の独創的研究は、その分野のすべての人が読むものであり、その翻訳から得られる高い評価と功績は専門の業績として評価されるべきである。

これらの推奨項目がガイドラインに述べた目標の実施を助けるならば、その分野の翻訳の数は増し、質は高まり、それによって、分野自体の幅はひろがり、深みがますこととなる。さらに、社会学者が自分の言語で書くことが奨励され(付録I参照)、多様な言語・文化集団からの社会科学への国際的貢献が促進されることとなる。

付録 A

社会科学翻訳プロジェクト参加者

Principal Investigators

Michael Henry Heim

Professor, Departments of Slavic Languages and Literatures and Comparative Literature, University of California, Los Angeles.

Andrzej W. Tymowski

Director of International Programs, American Council of Learned Societies.

Natalia Avtonomova

Senior Research Fellow, Institute of Philosophy, Russian Academy of Sciences.

Chuanyun Bao

Dean, Graduate School of Translation and Interpretation, Monterey Institute of International Studies.

Richard Brecht

Director, Center for Advanced Study of Language, University of Maryland.

Olga Bukhina

Coordinator of International Programs, American Council of Learned Societies.

Leonora Chernyakhovskaya

Director, Moscow International School of Translation and Interpreting.

E. Perry Link

Professor, Department of East Asian Studies, Princeton University.

Luo Xuanmin

Director, Center for Translation and Interdisciplinary Studies; Professor, Department of Foreign Languages, Tsinghua University.

Ramona Naddaff

Co-Director, Zone Books; Assistant Professor of Rhetoric, University of California, Berkeley.

Bruno Poncharal

Maître de conférences, Institut d'Études Anglophones, Université de Paris VII.

Janet Roitman

Chargé de recherche, Centre National de la Recherche Scientifique.

Irina Savelieva

Professor, Higher School of Economics, State University, Moscow.

Lynn Visson

Staff Interpreter, United Nations, retired; Editor, Hippocrene Books.

Wang Feng

Professor, Department of Sociology, University of California, Irvine.

R. Bin Wong

Director, Asia Institute; Professor, Department of History, University of California, Los Angeles.

付録 B

語彙集

2言語使[併]用者 (bilingual) 2つの母語を持つ人
(母語 参照)

翻訳借入語 (calque) ある語、表現と同じ意味を表すために、字句どおり翻訳した語を借入語として使ったもの。翻訳借入語は、最初はおかしく思われるが、使用されるに従って、受け入れられる。英語の **false friend** (そら似) は、フランス語の **faux ami** の、英語の **to kill time** (暇をつぶす) は、フランス語の **tuer le temps** の翻訳借入であり、フランス語の **gratte-ciel** は英語の **skyscraper** (摩天楼、超高層ビル) の翻訳借入語である。**calque** という語自体がフランス語 **calque** (透き写し、なぞり) の借入語である。借入語 (loanword) ともよばれる。(借入翻訳 loan translation参照)

なじませる、自国語化 (domesticate) 元の文化の起点を不鮮明にするほど、目標言語で滑らかに読めるようにすること。(外国語化 foreignize参照)

支配的言語 (dominant language) 2言語以上を話す人が、そのうち、もっともよく知り、したがって、通常それに翻訳する言語。大多数の人にとっては母語であるが、母語以外を使う国で育ち、教育を受けた人にとっては、その国の言語がこれにあたる。(母語 native language, 母語話者 native speaker参照)

そら似 (false friend) 2言語において、同一、あるいはほぼ同じ形を持ちながら、それぞれで意味の異なる語。英語 **sympathetic** (思いやりのある) 対 フランス語 **sympathique** (=英語の **likable, nice** 好ましい、いい)、英語 **gift**(贈り物) 対 ドイツ語 **Gift** (=英語 **poison** 毒)。それらは、借入語の場合が多い。例えば、ロシア語の **killer** (英語で **hit man** 殺し屋、**hired assassin** 雇われた暗殺者、の意味を表す)、フランス語 **pick-up** (英語 **record-player** レコードプレーヤーの意味)。また、「概念」のそら似をあげることもできよう。中国語 **xuanchuan** (宣伝*) に対し、英語、フランス語、ロシア語の標準的訳語は、**propaganda/propagande** (プロパガンダ) であるが、中国語では、他の言語において一様に見られる否定的な含みをもたない。そして、**democracy** (デモクラシー) は、すべてのヨーロッパの言語で、似た形をとるが、その意味は、文化ごとのみか、話し手、ひとりごとに違う。(借入語 loanword, 借入翻訳語 loan translation 参照)

外国語化 (foreignize) 翻訳に起点文化の起源を示す表現、あるいは、それを強調さえする表現を使うこと。(母語的 domesticate 参照)

伝承言語話者 (heritage speaker) 自分の家では、一般に共同体で話されている言語とは異なった言語を話し、共同体の言語で正式な教育、あるいは小学校教育より上の教育を受けていない人。伝承言語話者の言語能力は、人それぞれでかなり異なる。

通訳すること、通訳 (interpreting, interpretation) もとはある言語で話されたテキストを、他の言語で話して表現すること (翻訳—ある言語で書かれたテキストを書いて伝えること—とは区別する)。通訳には、連続的 (consecutive)—ひと区切りの原文の後、通訳者が訳を述べる—、同時的 (simultaneous)—話者の発言と同時に重ねて、通訳者が訳を述べるもの—の両者がある。通訳者と翻訳者に要求される技術には重複するものも多いが、それぞれが必要とする独特の技術もある。

語彙集 (lexicon) ある言語の語彙、単語の集積。

借入翻訳語 (loan translation) 翻訳借入語 (calque) の同義語。loan translation と言う表現自体が、ドイツ語の Lehnübersetzung の借入翻訳である。(借入語 loanword参照)

借入語 (loanword) 他の言語から、大体そのままの形と意味を借りた語。Sputnik (スプートニク、ロシアの有人宇宙船)、politburo (旧ソ連の政治局、政策最高指導機関)、glasnost (旧ソ連の情報公開政策)、perestroika (政治経済の改革、刷新) は、ロシア語から英語への借入語である。calque (翻訳借入語)、savoir-faire (機転、かけひき) sang-froid (冷静) は、フランス語から英語への借入語である。fengshui (風水)、kungfu (カンフー) は、中国語から英語への借入語であり、Weltanschauung (世界観)、Realpolitik (現実政策) は、ドイツ語から英語への借入語である。(借入翻訳語 loan translation 参照)

母語 (native language) 一般的には両親から、最初に習得する言語。大多数の人にとっては、支配的言語と同一。(支配的言語 dominant language、2言語使用[併]者 bilingual 参照)

母語話者 (native speaker) ある言語を母語として話す人、あるいは、その文化に同化した人。すなわち、ある言語で教育を受け、その社会の一部となった人。一般には、その言語がコミュニケーションの主たる手段となっている国で生まれた人に限らない。思春期以前にその国に到達していれば、母語話者となる。(母語 native language、支配的言語 dominant language、伝統言語話者 heritage speaker 参照)

起点言語 (source language) 翻訳の対象となる言語。翻訳に用いられる目標言語 (target language) と対照して使う。

構文 (論) 文法機能と関係を伝える語の配置 (syntax)。

目標言語 (target language) 翻訳に用いられる言語。翻訳の対象となる起点言語と対照して使う。

専門用語 (technical term) 専門的概念を伝える単語ないし表現—目標言語では基準化された用語が必要である。適当とする術語がない場合には、創出しなければならない。専門用語への依存度が多すぎる場合には—特に、用語がある内集団のみに理解されるような場合には—一職業語 (グループに限られた言語 jargon) となる。

付録 C

社会科学における翻訳シリーズの出版

ロシアには、出版社の性格と編集委員会の専門的能力により、それぞれ、学問分野、主題、時代、地域など別に組織された研究論文のシリーズを出版する積年の歴史がある。最近、モスクワの国立大学経済高等学院 (the State University Higher School of Economics (Moscow)) のイリーナー・サヴェリーヴァ (Irina Savelieva) をリーダーとする学者のグループが人文科学、社会科学の学術研究の翻訳に専念するシリーズを出版した。「大学文庫」(Universitetskaia biblioteka) とよばれるこのシリーズの目的は、ソビエト時代に翻訳されなかった西欧の古典的、および現代の論文の多くをロシアの学界に紹介すること、すなわち、空白を埋め、それなしには、ある学問分野の習得が考えられない基本的テキストを供給することにあった。ソロス財団のオープン・ソサイアティ・インスティテュート (the Soros Foundation's Open Society Institute) の支援を得て、大学文庫は2年間 (1998–2000) に120冊という信じがたい翻訳を出版して、賞賛を浴びた。

サヴェリーヴァ教授と7人からなる運営委員会は6学問領域 (哲学、社会学、文化の理論と歴史、経済理論、歴史、政治学) において、翻訳出版の対象となりうる文献のリストを作成することから始めた。例えば、社会学の見出しのもとに出版された文献の著者は、アドルノ (Adorno)、ボードリヤール (Baudrillard)、ブルデュー (Bourdieu)、カステルス (Castells)、ダーレンドルフ (Dahrendorf)、エ

リーアス (Elias)、ギデンス (Giddens)、ゴフマン (Goffman)、マンハイム (Mannheim)、パーソンズ (Parsons)、セネット (Sennett)、テンニエス (Tonnie) を含む。運営委員会と翻訳者は、著名な大学の教授陣である。翻訳者は、翻訳のサンプルを判断材料として選ばれ、すべての翻訳は、元の言語と学問分野に精通する専門家によって編集された。

これらの書物は、いろいろな出版社から出された。オープン・ソサイアティ・インスティテュートの総合企画事業 (the Megaproject) により設立された販売サービス機構が、需要を分析し、注文を集め、書物が大学図書館に確実に届くよう助力した。しかし、書物の圧倒的多数は、一般市場で売れた。プロジェクト計画者の予想した読者の大部分は、大学の教員と学生であった。当時、ロシアの高等教育機関は、60,000人以上の教員を有していたが、実際に外国語を使える者は、かろうじて、その10%にすぎなかった。その上、外国で出版された本を買う余裕のあるロシア人はほとんどいなかった。教員と学生によく売れたことで、読者が実際に存在することが証明された。

叢書、それを生んだ翻訳プロジェクト、出版された書物の全リストは、次を参照のこと：

www.hse.ru/science/igiti/article_literature_eng.shtml.

付録 D

参考図書 (Selected Bibliography)

総合的ハンドブック (General Handbooks)

Baker, Mona. *In Other Words*. London: Routledge, 1992.

Newmark, Peter. *Textbook of Translation*. New York: Prentice-Hall International, 1988.

(両者ともに、翻訳過程の基本を示し、ともに文学翻訳への偏りがあるが、その述べる技術は、社会科学のテキストにも同様に適用できる。)

翻訳と社会科学 (Translation and the Social Sciences)

Argenton, Elena. *The Translation of Culture-bound Terms*. Trieste: Università degli Studi di Trieste, 1983.

Barret-Ducrocq, Françoise. “Les sciences humaines au carrefour des langues.” *Traduire l'Europe*. Paris: Payot, 1992.

Katan, David. *Translating Cultures: An Introduction for Translators, Interpreters and Mediators*. Manchester, UK: St. Jerome Publishing, 1999.

Mossop, Brian. “Translating Institutions and ‘Idiomatic’ Translation.” *META: Translators Journal*, 35(2), 1990, 342–355 (改訂版は次を参照 www.geocities.com/brmossop/mypage.html).

Wallerstein, Immanuel. “Concepts in the Social Sciences: Problems of Translation.” *Translation Spectrum: Essays in Theory and Practice*. Ed. M.G. Rose. Albany: State University of New York Press, 1981, 88–98. (付録 Hに引用文を収録。)

—. “Scholarly Concepts: Translation or Interpretation?” *Translation Horizons*. Ed. M.G. Rose. Binghamton, NY: Center for Research in Translation, 1996, 107–17.

特定の言語を対象とするハンドブック (Language-Specific Handbooks)

Meertens, René. *Guide anglais-français de la traduction*. Paris: Chiron, 2004.

Visson, Lynn. *From Russian Into English: An Introduction to Simultaneous Interpretation*. Ann Arbor, MI: Ardis, 1991. (会議通訳を中心とするが、その大部分は翻訳にも適用できる。)

訓練 (Training)

Gile, Daniel. *Basic Concepts and Models for Translator and Interpreter Training*. Amsterdam: John Benjamins, 1995.

Campbell, Stuart. *Translation Into the Second Language*. London: Longman, 1988.

Grosman, Meta, ed. *Translation Into Non-Mother Tongues*. Tübingen: Stauffenberg, 2000.

Kussmaul, Paul. *Training the Translator*. Amsterdam: John Benjamins, 1995.

“European Association for Language Testing and Assessment Report,” www.ealta.eu.org/resources.htm. (www.ealta.eu.org/links.htm も参照)

American Translators Association. atanet.org/certification/eligibility_approved.php.

職業としての翻訳案内 (Guides to the Profession)

Sofer, Morry. *The Translator's Handbook*. 3rd rev. ed. Rockville, MD: Schreiber, 1999. (エディター、職業的翻訳者、両者の関心事の情報：評価、機器、参考書目、インターネット、雇用源、翻訳者協会、翻訳者訓練など。)

European Commission. ec.europa.eu/translation/index_en.htm.

理論 (Theory)

Bell, Roger. *Translation and Translating: Theory and Practice*. London: Longman, 1991.

Bush, Peter and Bassnett, Susan. *The Translator as Writer*. London/New York: Continuum, 2006.

Chestman, Andrew and Emma Wagner. *Can Theory Help Translation?* Manchester: St. Jerome, 2002.

Gile, Daniel. *La Traduction: la comprendre, l'apprendre*. Paris: PUF, 2005.

Hacking, Ian. "Was There Ever a Radical Mis-translation?" *Historical Ontology*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 2002.

機械翻訳 (Machine Translation)

Bass, Scott. "Machine vs. Human Translation" www.advancedlanguagetranslation.com/articles/machine_vs_human_translation.pdf.

Bowker, Lynne. *Computer-Aided Translation Technology: A Practical Introduction*. Ottawa: University of Ottawa Press, 2002.

Hutchins, John. "Computer based translation in Europe and North America, and its future prospects." JAPIO 20th anniversary. (Tokyo: Japan Patent Information Organization, 2005), 156–160. <http://ourworld.compuserve.com/homepages/WJHutchins>.

Nirenberg, Sergei et al., eds. *Readings in Machine Translation*. Cambridge, MA: MIT Press, 2003.

O'Hagan, Minako and David Ashworth. *Translation-Mediated Communication in a Digital World*. Clevedon: Multilingual Matters, 2002.

Somers, Harold, ed. *Computers and Translation: A Translator's Guide*. Amsterdam: John Benjamins, 2003.

参考書目

(Reference Works)

Jean Delisle et al. *Terminologie de la traduction/Translation Terminology/Terminología de la traducción/Terminologie der Übersetzung*. Amsterdam: John Benjamins, 1999. (4言語で200の概念をはっきりと定義しており、エディターが翻訳者とのコミュニケーションを図るのを助ける。)

Randall, Barry. *ALA-LC Romanization Tables*. Washington: Library of Congress, 1997.

定期刊行物

(Journals)

ATA Chronicle. (American Translators Association. Monthly.)

BABEL. An International Journal on Translation. (International Federation of Translators. Quarterly.)

META. Journal des Traducteurs/Translators Journal. (Organe d'Information et de Recherche dans les Domaines de la Traduction, de la Terminologie et de l'Interprétation. Quarterly. Available on line: www.erudit.org/revue/meta.)

TTR – Traduction, Terminologie, Rédaction. (Association Canadienne de Traductologie/Canadian Association for Translation Studies. Biannual.)

分野別辞書

(Examples of Useful Field-Specific Dictionaries)

Cassin, Barbara, ed. *Vocabulaire européen des philosophies – dictionnaire des intraduisibles*. Éditions du Seuil. Paris, 2004.

Marshall, Gordon, ed. *A Dictionary of Sociology*. Oxford: Oxford UP, 1998.

Pearce, David, ed. *Macmillan Dictionary of Modern Economics*. London: Macmillan, 1992.

Ritter, Harry. *Dictionary of Concepts in History*. Westport, CT: Greenwood Press, 1986.

付録 E

エディターのケース・スタディー

適切な専門知識を持ち、経験のある翻訳者を得るためのすべての試みが無に帰した時、我々の出版社は、その分野の大学院生を雇うことに決めた。彼女は、翻訳すべき研究が扱っている国々でジャーナリストとして数年間働き、関係の深い話題についての博士論文を執筆中であったが、翻訳の経験はなかった。私は、彼女と数回の準備会議をし、その場で、翻訳の一般的な手続きを説明し、以前に検討した欠陥のある翻訳の例を示した—あまりにも忠実な、つまり、文字にとらわれすぎた表現、フランス語なら通用するかもしれないが、英語では不可能な、無限につづくように見える複合文やパラグラフのテキストなど。私は、原文テキストを盲目的に真似るのではなく、それを目標言語に写し取る調子やスタイルを見出す必要性を指摘した。また、各種の研究用情報源や仕事に必要なテクニックについても話しあった—ソノラスの使用、同じ話題について、もともと英語で書かれた書物を読むことなど。私は、原著者、編集者と連絡を保つこと、それぞれに対する質問のリストを作成すること、専門用語の語彙集を作成すること、引用箇所の標準的英語翻訳を探し、その翻訳が不十分ならば、その例を明らかにするなどを強調した。これは翻訳技術のミニ・ワークショップということになった。この長いきびしい課程のおかげで、そして、翻訳者の熱心、聡明さ、そして勤勉な仕事により、結果はすばらしい翻訳となった。

私がこの経験を語ると、ある同僚たちは、結果がいかにすばらしくろうと、翻訳者を自分たちで訓練するために必要とされる努力は、あまりに重過ぎると反応した。私も翻訳の必要が生ずるたびに、このような「ミニ・ワークショップ」を行いたくはない。将来の世代の社会学者に高度な言語教育のみでなく、翻訳そのものの訓練が望まれることを、社会学者が認識することがより望ましいことである。

使えない翻訳への対処

ある学際的研究書のために、18世紀から20世紀に亘る文学、歴史、政治、精神分析、医学、人類学の文献を扱える翻訳者を必要としたので、我々の翻訳社は、以前、文学作品を翻訳していい仕事をしてもらった翻訳者を契約した。しかし、サンプルとして訳した章を検討すると、翻訳者が、テキストの文学的でない言語や論証を、再現できないのはもちろん、理解もできていないことを認識した。私は、問題点を翻訳者とともに検討し、改定を求めた。その改定版を原著と細かく照合したが、結果はまだ不適當なものであった。そこで、書き直すためにもう一人の翻訳者を契約した。さえない翻訳を書き直しても優秀な結果になるとは限らないが、この場合には、「共訳者」は我々の望むところになかった仕事をし、最終的には、十分によいテキストを完成し、彼と最初の翻訳者は、共訳者としてサインすることに同意した。

著者の参加について：ある警告

著者は、翻訳者および編集者の質問に答え、使用した参考資料を提供するなど、翻訳の過程で役に立つ協力者となる可能性がある。しかし、私は、著者が翻訳者を選んで起こったある件を思い出す。著者は、以前、満足のいく論文翻訳をしてもらったとして、ある翻訳者を自ら選ぶことをした。その上、著者は、自分が完全な2言語使用者であると主張した。しかし、翻訳の過程で、我々は著者が目標言語においても、適当な判断をする能力がないことを、彼に認識してもらわざるをえなかった。二人の高名な専門家が、翻訳を検討して、著者の業績における理論的新機軸を明確にしていなと批判して、最終的には、彼は我々の懸念が正しいと受け入れた。

付録 F 逐次訳的な翻訳例

未熟な翻訳者の失敗のほとんどは、起点言語の形式的な要素に過度に依存し、かなり逐語的な翻訳を作り出すことによる。下記の立体の文は、そのような逐語的訳の例であり、斜体の文は、よりよい翻訳である。(注意: 起点言語の引用文は示さない。起点言語をよく知らないエディターは、目標言語のみで判断しなくてはならないからである。)

1. 翻訳が出版可能な質でなくてはならないところでは、人間による翻訳 (HT) と MT の両方が彼らの役割を持つ。MT は (うんざりするような) 専門の文書しらべ、(高度に繰り返しの) ソフトウェア局限定マニュアル、その他 MT プラス本質的な人間による準備と修正のコスト、あるいはコンピュータ化した翻訳道具 (ワークステーションなど) を使うコストが、コンピュータの援助なしの伝統的 HT より意味ありげに少ない状況では、大規模な、そして、あるいは速い翻訳のためには、明白に費用に対して効果が高い。対比して、人間の翻訳者は非反復的な言語的に洗練されたテキスト (例えば、文学や法律)、そして、一回限りの非常に高度に専門的な主題に対してさえ、競争者が少ない (そして、将来もないであろう)。

出版に適した質が翻訳に求められる場合には、人による翻訳 (HT) と MT はそれぞれ別々の役割を担う。MT は、(退屈な) 技術文書、(繰り返しの多い) ソフトウェア・マニュアルの翻訳の大規模な、および/あるいは迅速な翻訳には、明らかに経済的である。そのほか、MT プラス基本的には人による準備と修正の費用、あるいは (ワークステーションなどの) コンピュータを道具として使う費用が、伝統的

なコンピュータの助けなしの HT による翻訳の費用より少ないという多くの場合も同様である。対照的に、人間の翻訳者は、重複の少ない凝った文章 (文学・法律などの) については絶対に必要であり、また将来も必要であろう。そして、特定の非常に専門性の高い一回限りの技術的主题の翻訳についても同様である。

2. 理想的には、従って、翻訳者は一般的なテクニックとして翻訳に熟練している人ではなく、長い間、その下位分野の文学に親しんでいる人でなければならず、またテキストで議論している材料に直接興味を持つ人がのぞましい。この理想は、社会科学を専攻し、翻訳のテクニックと社会科学の両方で訓練された一団の翻訳者の作り出しに向かって我々が動くまで、実現されることは絶対でない。私は、ここで、そのような組織を作る組織的先行条件を討議することはしない。今、彼らが存在しないといえれば十分である。翻訳のほとんどは、翻訳がうまくない社会学者によってか、社会科学ではなく、文学に主たる背景を持つ翻訳者によってなされている。その結果は、大部分ぞっとするようなものだ (顕著な一しかしまれな一例外はあるが、たしかに)。

従って、理想的には、翻訳者は一般的なテクニックとしての翻訳に熟達しているのみではなく、長い間、その下位分野の文献に慣れ親しんでいる人でなければならず、テキストで取り上げている題材に直接興味を持つ人がのぞましい。この理想は、社会科学を専攻し、翻訳のテクニックと社会科学の両者の教育を受けた

翻訳者の一団を生み出す方向に向けてことを進めてはじめて実現する。ここで、そのような集団を作る組織的前提条件を論じることはしない。そのような人々が今は存在しないと言えば十分である。社会科学における翻訳のほとんどは、いい翻訳者とはいえない社会学者によってか、社会科学ではなく、文学を主たる背景としている翻訳者によってなされている。その結果は、大体、ひどいものである(たしかに、まれには、優れた翻訳という例外もあるが)。

3. 「社会科学の教科書はコミュニケーションの中心的様式として、概念を使う。その概念は著者によって、かなりはっきりと定義され、応用される。一方では、それらは、意味の分割された参照、データの分割された総計、あるいは現実の分類である。他の何人かの人々と分割していなければ、教科書は難解なこととなる。他方では、それらの概念は、普遍的に分割されず、あけっぴろげな、激しい衝突の主題となる。一つの概念をよく翻訳するには、翻訳者は (a) どの概念でも、事実、どの程度分割されているか(また、誰によって)、書かれた時点と翻訳の時点で、(b) 2つの言語のおのおのの変種。翻訳者は著者の分割の程度の認識—すなわち、彼が概念自体についての討論の正当性を

認識しているか、進んで認めるか—について推測すべきである。」

「社会科学のテキストは概念を伝達の中心形式として使う。著者は、概念をかなりはっきりと定義して使用する。一方では、概念は互いに共有する意味(共通に理解する意味)への言及であり、データ要約と現実の分類を共有するための表現である。概念を他の人々と共有するのでなければ、テキストはわけの分らないものとなる。他方では、これらの概念は、普遍的に共有されているものではなく、率直、かつ激しい論争の対象となる。ある概念の適当な訳に達するためには、翻訳者は、(a) 原文が書かれ時、その概念が事実、どの程度まで共有されていたか、翻訳時にどの程度まで共有されているか、(b) 両言語のそれぞれで、共有する社会集団間に存在する差異がどの程度か、を知っていなければならない。翻訳者は著者が共有の程度をどう理解しているかも推測できなくてはならない—すなわち、著者が概念自体について議論することの正当性に気づいており、概念を議論する必要を自ら認めるかどうかである。

4. これは高い注文であり、事実上、そのような情報を提供する参考の書物はない。辞書は、最上のものでも、大体、役に立つことはすくない。百科事典はときにはもっと役に立つ。しかし、本質的には、この知識を得るたった一つの方法は、下部分類で広く読んでいて、この読書を両言語でしていることである。

これは難しいことであり、そのような情報を提供する参考文献はほとんどない。辞書は、最上のものでも、概してほとんど役に立たない。百科事典が時にはもうすこし役にたつ。しかし、本質的には、この知識を得るたった一つの方法は、その下位分野で広く読書をしていること、また、両言語で、このような読書をしていることである。

5. 時折、脚注の必要性はかっこの中の翻訳のあとに、起点言語の用語を入れることにより、減じたり、完全に除去したりすることができる。ロシア語 *politruk* の同義語として英語 *political instructor* を使った場合に帰ってみよう。再び、もし、用語をとりまく文脈が、軍隊との関連を十分に明らかにしている場合には、翻訳者はそれを翻訳の後、元の言語で、かっこの中に入れてもいい—イデオロギー指導者 (*political instructor*,

politruk)—それにより、その地位が専門用語であることを指示し、元の形でその用語に親しんでいる読者の人々に、起源を合図するために。しかし、そのような仕掛けにしばしば依存するのは、逃げ道になるかもしれないので、勧められない。翻訳者の能力に対する信頼の下を掘るようなことにもなりかねない。

ときには、脚注が必要な場合にも、翻訳の後に起点言語の用語をかっこに入れて示すことで、煩雑さを緩和ないし回避できる。ロシア語の *politruk* に英語 *political instructor* を訳語として当てた例に返ってみよう。用語の周辺の文脈が、軍との関係を十分明らかにしているならば、翻訳者は、翻訳のあとに原語をかっこに入れて、教育指導者 (*politruk*) と示してすますこともできる。それによって、専門語という地位を示し、原語でこの用語を偶然、知っている読者に、その語の起源を示すことができる。しかし、そのような手段は、逃げ道になりかねないので、しばしば使うことは勧められない。翻訳者の能力に対する自信を傷つけるおそれもある。

付録 G 機械翻訳

1950年代、コンピュータ時代の幕開けに、機械翻訳(MT)の支持者は、コンピュータはキーを押すだけで翻訳を作りだすことができるように、まもなくならうと予言したが、1960年代、1970年代になると、彼らはその予言を変更しなくてはならなかった。しかし過去20年間に、2つの重要な発展があった。すなわち、コンピコンピュータがすべき仕事に見合う能力を持ち始めたこと、そして翻訳者がMTのできることを、できないことについてよりよい理解に達したことである。

出版に適した質が翻訳に求められる場合には、人による翻訳(HT)とMTはそれぞれ別々の役割を担う。MTは、(退屈な)技術文書、(繰り返しの多い)ソフトウェア・マニュアルの翻訳の大規模な、および/あるいは迅速な翻訳には、明らかに経済的である。そのほか、MTプラス基本的には人による準備と修正の費用、あるいは(ワークステーションなどの)コンピュータを道具として使う費用が、伝統的なコンピュータの助けなしのHTによる翻訳の費用より少ないという多くの場合も同様である。対照的に、人間の翻訳者は、重複の少ない凝った文章(文学・法律などの)については絶対に必要であり、また将来も必要であろう。そして、特定の非常に専門性の高い1回限りの技術的主題の翻訳についても同様である。¹

この進展はちょうどいいタイミングであった。政府、NGO、メディア、そして学者たちも、グローバル化が言語に及ぼす結果に直面しており、世界規模のコミュニケーションの速度と規模は爆発的に広がっている。もしゲーテンベルグの印刷機が時間という障害を除去したとすれば、インターネットは距離を無意味なものとしている。効果的な翻訳サービスの不足が世界の人々の間の自由なコミュニケーションの最後の障害となっている。

翻訳を考えたい材料の量はまさに膨大で、すべてのテキストをある言語から他の言語へと完全な形に変えることができるとは考えられない。完全な翻訳は、最近までは規範であったが、いまでは可能性のスペクトル(範囲)の一方の端に位置する。条約や政府間の協定、世論調査、調査書、助成金申請などのためには、これは今でも規範であり、それぞれの言語の翻訳は「公式文書」として扱われなければならないものである。また、学術的著作も同様である。これらにおいては、翻訳を評価するにあたって伝統的に使われてきた価値—正確さ(内容の再現)と忠実性(形式の再現)—が重要である。スペクトルのもう一端にはいろいろな断片的翻訳が存在し、その目的はある言語に、もう一つの言語のテキストで言及されているトピックが、時には項目だけが、何であるかを示すことにある。すなわち、テキスト中で、誰が、何を、何時、どこでということが分かればいい。ここでは、内容についての関心が優先する。政府機関やインターネット・サーファーが、あるテキスト(あ

¹ John Hutchins. "Computer based translation in Europe and North America, and its future prospects." JAPIO 20th anniversary. (Tokyo: Japan Patent Information Organization, 2005), 156-160. <http://ourworld.compuserve.com/homepages/WJHutchins>.

るいはウェブサイト)が必要なものかどうかを判断したいときに、その目的に合っているのはスペクトルのこの端であり、ここではMTが優れている。MTは、キーワードを探し、あるいは翻訳し、また元の言語のテキストのサマリー（時折、gistings（要約）とよばれる）を目標言語で作るための材料を提供する役割を果たすことができる。概していえば、MTは、望まれる成果が翻訳そのものでなく、翻訳の第一歩であるときに、その目標へ至る手段として、その地位を獲得しつつある。

MTとHTを併用する方法が最近もてはやされている。コンピュータ援用翻訳 (computer aided translation, CAT) である。人間の翻訳者はすでにオンライン辞書、シソーラスなどを参考の道具として使っている。MTはさらに進めて、起点言語と目標言語、両方の、構文と語彙のコロケーション(連語関

係)―(後者は専門用語の整合性を保つためにとくに有用である)―を自動的に記録・記憶する装置に保存するソフトウェアを組み込み、テキストに次に出てきたときに、翻訳として提案してくれる。さらに情報を求める方は次を参照： スコット・バス「機械翻訳 対 人間翻訳」Scott Bass, “Machine vs. Human Translation” www.advancedlanguagetranslation.com/articles/machine_vs_human_translation.pdf.

そうはいうものの、MTで作った草案、CATの草案でさえも、これを出版できる翻訳にすることは、人間の翻訳者にとって、より伝統的な翻訳に必要とされるほどの労力を要する大変な仕事である。それゆえ、言語面で優れたテキストで、眼識のある多くの読者を対象とするものは、予見できる将来の範囲では、このガイドラインにより提案されるプロセスを必要とすることが続くであろう。

付録 H

Immanuel Wallerstein, “Concepts in the Social Science: Problems of Translation” (社会科学における概念：翻訳の問題) *Translation Spectrum: Essays in Theory and Practice*. Ed. Marilyn Gaddis Rose (Albany: State University of New York Press, 1981), 88–98より。

「社会科学のテキストは概念を伝達の中心形式として使う。著者は、概念をかなりはっきりと定義して使用する。一方では、概念は互いに共有する意味(共通に理解する意味)への言及であり、データ要約と現実の分類を共有するための表現である。概念を他の人々と共有するのでなければ、テキストはわけの分からないものとなる。他方では、これらの概念は、普遍的に共有されているものではなく、率直、かつ激しい論争の対象となる。ある概念の適当な訳に達するためには、翻訳者は、(a) 原文が書かれ時、その概念が事実、どの程度まで共有されていたか、翻訳時にどの程度まで共有されているか、(b) 両言語のそれぞれで、共有する社会集団間に存在する差異がどの程度か、を知っていなければならない。翻訳者は著者が共有の程度をどう理解しているかも推測できなくてはならない—すなわち、著者が概念自体について議論することの正当性に気づいており、概念を議論する必要を自ら認めるかどうかである。

これは難しい注文であり、事実上、そのような情報を提供する参考文献はない。辞書は、最上のものでも、大体、ほとんど役に立たない。百科事典が時にはもうすこし役にたつ。しかし、本質的には、この知識を得るたった一つの方法は、その下位分野で広く読書をしていること、また、両言語で、このような読書をしていることである。」

「したがって、理想的には、翻訳者は一般的な翻訳の技能に優れているばかりでなく、長期間に亘ってその下位分野の文献をよく知っている人でなければならず、さらにテキストにおいて討議される題材に直接興味をもっていることが望ましい。この理想は、我々が社会科学を専門とし、翻訳の技能と社会科学の両者で訓練を受けた一団の翻訳者を作り出す方角へ動くまでは、決して実現しないであろう。そのような人々の組織を作るための機構に関する必要条件はここでは扱わない。そのような人々が今、存在しないといえれば十分であろう。社会科学の翻訳の大多数は、翻訳者としては優れていない社会学者によってか、社会科学というより、文学の翻訳を主として手がけた翻訳者によってなされている。結果は、大部分、不満足なものである(もちろん、まれには、優れた翻訳という例外もあるが)。」

付録 I

社会科学者への呼びかけ：自分の言語で書いて欲しい

英語はますます国際的な社会科学の論述の言語となってきた。テキストの翻訳は、英語へより、英語からがはるか多数となっている。その上、世界中の英語圏外の社会科学者は英語を使って書くことを好むようになってきている。この行為は社会科学の分野それ自体に問題を引き起こしていると考え、我々は、社会科学者たちに自分の言語で書くことを放棄しないように訴える。

社会科学の概念と、それを伝える用語は、もともとその概念が生み出された言語の特徴により形成され、その結果、その言語の使用の文化的・歴史的経験により形成されている。フンボルト(Humboldt)が、その著作『バスク人に関する論文断片 (*Fragments of a Monograph on the Basques*)』に述べるように「言語の多様性はある客体に対する名称の多様性であると単純化はできない。それらの名称は、その客体に対する異なった見方なのである。... 世界とそこで我々が知覚するものの豊かさは、言語の多様性に正比例して増し、言語の多様性はまた人間の存在の境界を広げ、新しい考え方と感じ方を我々に提供する」(『著作集』 (*Gesammelte Schriften*, VII: 602)。社会科学において英語が共通語となる傾向は(自然科学では既成事実であるが)、フンボルトの言う「異なった見方」を生み出す社会科学の能力を抑圧する。

ある一つの言語が次第に支配権を握っていくことは、いくつかの有害な結果を招いている。第一に、第二言語で書く書き手は、いかにその言語に習熟していても、自分の言語で書く書き手ほど、正確さと微細なニュアンスを使って、考えを表現することができそうにない。第二に、ある自然言語で書かれた豊かな社会科学文献が不足すると、その言語社会における社会科学の学問分野の論争点についての意志伝達の基盤が損なわれることとなる。第三に、英米社会科学社会の思考と論議の形式が、すべての概念化を無理やりに合わせなくてはならない押し付けられた基準となっている。その結果は、社会科学論争の均質化と貧困化を増すこととなる。

上記の考察と、ガイドライン全般からの帰結は、多様な言語と文化から提供される多様な見地から書かれた研究の優れた翻訳は、より深い異文化間の対話を促進し、社会科学自体を再活性化することを助けるとのことである。したがって、研究者は自分の学問分野において翻訳が果たす役割に、より大きな関心を向ける必要がある。年長の、そして若い同僚に、他の言語で書かれた重要な論文の翻訳を手がけるよう激励し、奨学金支給団体、終身雇用・昇格資格審査委員会に、そのような翻訳の学問的性格と価値を認識させるよう具体的な手段を講ずるべきである。